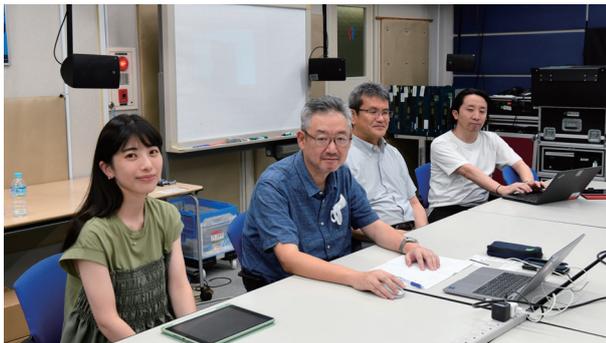


ACT.3 ヤマハサウンドシステム株式会社

広報部会

ヤマハサウンドシステム株式会社（以下、YSS）は、世界に数多くあるヤマハのグループ会社の中でも唯一の設備音響エンジニアリング会社です。ご存じの方も多いと思いますが、ヤマハ株式会社は1887年、山葉寅楠がリードオルガンの製作に成功し、創業。以来、ピアノづくりをはじめとする楽器、デジタル技術を駆使した音響機器・ネットワーク機器の製造など、「音・音楽」を中心とした多岐にわたる事業展開をしています。

今回は、9月の事業所移転を前にお忙しい中、東京都中央区日本橋蛸殻町にある蛸殻事業所に訪問し、平井智勇社長をはじめ、西村岩夫顧問、マーケティング部の浅原康二部長、松田光史さん、木村優佳さんにお話を伺うことができました。



上の写真は平井社長、下の写真は、スタジオにて撮影
（左から木村さん、浅原部長、西村顧問、松田さん）

設立までと現在・未来

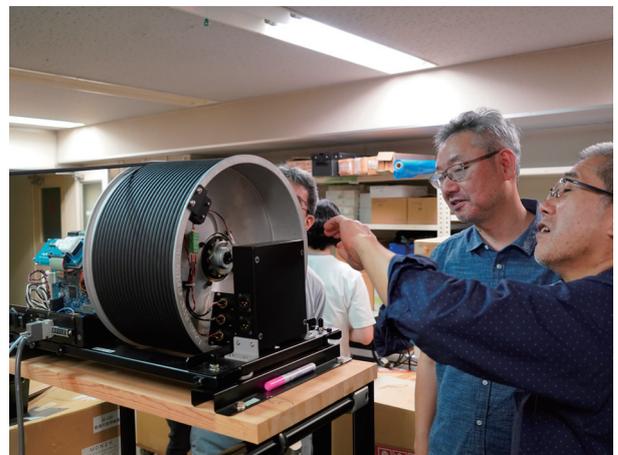
「ヤマハサウンドシステム株式会社」が設立されたのは、2009年のこと。それほど昔のことではありません。ただ、YSSの歴史は長く、ホール劇場音響設備の老舗的な存在と言えます。第二次大戦後間もない1946年「不二音響工業株式会社」、1962年「三精音響設備株式会社」の設立に遡ります。両社は、1950年代半ばのテレビ放送の普及とともに成長してきたそうです。

1980年「株式会社サンセイエンジニアリング（前述、三精音響設備株式会社から数回社名変更）」がヤマハ株式会社（旧日本楽器製造株式会社）と業務提携した「ヤマハサウンドテック株式会社」、2007年ヤマハ株式会社が株主となった「不二音響株式会社（前述、不二音響工業株式会社か

ら数回社名変更）」の2社が合併し劇場・ホール・大型スポーツ施設の音響設備を設計・施工をする会社「ヤマハサウンドシステム株式会社」を設立。世界に展開するヤマハグループの中で音響設備を設計・施工する会社はYSSが唯一だそうです。

旧不二音響は、デジタル音響調整卓やパワーアンプなど音響機器を自社で開発、製造しており、特に民間商業劇場の要求に対応できる高い技術力を持っていました。また、旧ヤマハサウンドテックは、主に公共劇場・ホールなどで、ヤマハと連携し、いち早くオーディオネットワーク技術を取り入れるなど、エンジニアリング力を持っていました。この2社が持っていた技術と精神が「強み」として、現在のYSSに活かしているとのこと。

現在、旧不二音響の技術は「ハイファクス（HYFAX）シリーズ」として、電動吊りマイク装置など劇場・ホール・大型スポーツ施設に特化したプロフェッショナル向けの音響製品を開発・製造、販売されています。



電動吊りマイク装置の実物

（ドラムにはHYFAXの刻印も見る事ができる）

前述したように、2024年9月にYSSは、現在の東京の日本橋から、横浜みなとみらいへ事業所を移転し、楽器、音響を含め首都圏のヤマハグループの約9割が集結することになるそうです。

平井社長によれば、これを契機に、楽器・音響機器などのメーカー「ヤマハ」をはじめとするヤマハグループ各社とのシナジーを生み出し、YSSは、街の賑わいを創出する、コンテンツにまで至る、「音のシステムインテグレーター（System Integrator）」を目指して行きたいと熱く語っていただきました。

「いい音」「いい音響」とは

現代において、“いい音”はあるのか。“いい音響”とは何なのか。若干、素人っぽい、いじわるな質問を投げかけてみました。

“いい音”の定義は、感じる人それぞれで異なるものなので明文化することは難しいと前置きした上で、「ホール・劇場の音響設備としては、どの席でも同じ音質と音量、ハウリングを発生させない安全な拡声、ノイズが少ないということは基本性能として大事です。ただ、お客様が音をどう感じているかを重要と考えています。特に劇場・ホールではスピーカーや音響設備の存在に気づくことなく公演に集中してもらうことも“いい音”です。測定器に表示されるフラットな周波数特性が“いい音”とは限りません。また、私たちが納入した音響設備をオペレーターの方がストレスを全く感じない『使いやすいこと』『安全なシステムで安心して操作していただくこと』が“いい音”に寄与する大事な要素と考えています」とことでした。

音響設備を構成する音響機器についても“いい音”をどう考えるかを聞いてみましたが、「入ってきた音を、そのまま出すこと」これに尽きるそうである。



デジタル音響機器が主流となった現在では、音響システムブロック、操作性など、ソフトウェアで調整、変更が可能となっています。そこで「使いやすさ」と「安全安心」を追求し、YSSとしては、顧客の要求に寄り添う姿勢を貫いてゆきたいと言われていました。

YSSが多く使うヤマハのデジタルミキサーなど主要機器は検証機として購入し、システム構築検証にも使用するが、万が一のトラブル時にも再現できる環境をつくっているという。

ただ、皆さん「言語」によって向いている音響システムがあるとか、そんな音のミステリアスな話は大好きで、実は仕事のやりがいもそこにあるのだけれど、その話になると今日のインタビューが終わらなくなるからと、冗談めかして話されていました。

これからのキーワードは「イマーシブ」

では、これからの音響システムのキーワードは何なのかを聞いてみました。出て来たキーワードが「イマーシブ (immersive)」でした。

イマーシブと言うと「没入感」と訳されますが、一言で言うところ「どこの席にいても同じ自然な音空間の中にいる」それが構築できるシステムと筆者には聞こえました。すでに、技術的には可能ですが、どうしても現場の方からは、ツアーではセッティングが大変なのではないかという声が多いと言います。しかし、慣れてしまうと効率よくセッティングでき、得られる効果の価値が高く、劇場にイマーシブのシステムが当たり前前に常設されるようになって行けば、もっと身近なものになるのでは、そのようになって欲しいと言われていました。

ただ、彼らの悩みは、究極のイマーシブは「音響設備に気づくことなく公演に集中してもらうこと」であるので、皆さんがその「気づかないこと」に価値を見出してもらえる時代にしていけたら、とのことでした。これからの時代、少子高齢化も進み、省力化と高いクオリティの両立が求められる時代。長期的な目でみれば、そのコストも高いものではないのではなくなるのかもしれない。

音響とネットワーク化の技術について

最近は当たり前になっている「ネットワーク技術」と音響について聞いてみました。

音響システムは、アナログ機器をデジタル機器に置き換え、音響信号をIP伝送するネットワーク化する形となり、いまは「音響」と「ネットワーク」「コンピュータ」が切っても切れない強い関連性があるそうです。確かに最近訪問した劇場、ホールの音響調整室にはPCやディスプレイが多く設置されていた。

ヤマハはネットワーク機器を音響システムで使用される以前から作っていたこともあり、実績が多く信頼度が高いとの評価を受けています。光ケーブルなども、昔と比べて桁違いに良いものが普及してきた現在、逆に問題となるのは、エンジニアリングの信頼度だと言います。



検証・設定用のネットワーク機器

ネットワークは、基本的に目に見えないものです。安全性の向上を目的にネットワークを二重化するなどトラブル回避対策をしたとしても、実際の現場でネットワークが正常に動作しているかどうかを正確に把握することは困難です。そこで、YSSは、ネットワークの動作状況を可視化することに取り組んでおり、実際に「ネットワーク監視システム」を見せていただくことができました。



ネットワークが正常な状態では、緑が点灯



異常が検知されると場所が特定されて赤に変化、アラートが出る。

公共空間の音づくりで社会に貢献する

YSSの最大の特徴は、「音を提供する会社で、物を提供するのではない」という考えであることと「ヤマハグループの中であって中立的な立場にある」と言います。ヤマハグループというメーカーの一面を持ちつつ、自由度のある会社で、海外や他社の製品を使用した音響システムの構築も可能と云うことです。

YSSの使命は「公共空間の音づくりで社会に貢献する」。アーティスト、スタッフ、オペレーター、観客、劇場、周辺地域までを含み、すべてのお客様にとって“いい音”を提供すること。「あそこのホールは音が良い」と言われることが、地域への貢献につながると考えているそうです。そしてそれを裏付けるものがエンジニアリング力です。

繰り返しになりますが、“いい音”の定義は人によって違うので、現場のオペレーターの方々にとって“いい音”を見出せる、そして「使いやすく」「安全安心」の環境をつくりたい、そのためには現場の方々とのコミュニケーションを取りながら進めることが最も重要だと考えているとのことでした。

若手社員の方々からしっかりと経験を積むことができる、仕事のしやすい会社だとお聞きしました。また、社内には、音響のみならず、他分野の経験者も多く、知りたいことを知ることができる機会が多いという事です。

木村さんも、大学で舞台をやっておられたけれど、文系大学の出身。入社してから多くの現場を体験し、今では音場支援システムのヤマハ「AFC」の最終チューニングを任せられ、活躍されているそうです。

印象的だったのは、「最後は人の耳。音に魂を入れるのも人間」「工事完了がおわりではなく、スタート」という言葉でした。システムを導入するだけではなく、保守メンテナンスをしながら長期にお客様に寄り添うという人間みじみところが、YSS精神であるというお話しです。

今回の聞き手は、建築分野の人間が多かったのですが、劇場についているスピーカーの姿も実は重要、しかし、危険なものは絶対にNG。まだまだ、エンジニアリングの力で、注げるものは多いとの言葉にプロ集団としての自負を感じた取材となりました。

移転前のお忙しい中、取材に応じていただきありがとうございました。

聞き手 広報部会 古橋部会長 西副部会長
小林副部会長（取材日 令和6年7月16日）